

京阪古方と金元医学

石田秀実

通説によれば、京阪の古方は、金元の医学に対するアンチテーゼとして興ったとされる。経験的事実から遊離した運氣理論を批判したという点では、一応そうした理解は認められてよい（もともと経験から遊離しない範囲では、彼等とて運氣を語ることもあるのであるが）。

けれども、彼等が自己の理論を導き出すにあたって使用した方法論に注目する時、我々は彼等と金元医学の間に、共通のものがあることを認めざるを得ない。いずれも、自己の経験と思索から見出した独特の見解を主張するために、数有る古典の理論中から、自己の見解に合致するものだけを取り出し、結果的には彼等それぞれの新医学を提唱しているからである。C・パス流に言えば、「權威の方法」と呼ぶしかないこうした方法論を、京阪古方家は時に錯簡重訂学派的な、表面的客観性の網の目で覆いかくそうとする。

であれば、我々は京阪古方家を、古医学に戻ることによって觀念論的医学の改革を図ったという評価においてではなく、彼らそれぞれの新しさにおいて評価しなおさねばならない。望月三英、今大路元勲ら江戸古方の人々が、伝統医学本来の治療原則を、経験に即して探求していったことと比較する時、このことは一層明確となるだろう。

よく言われる京阪古方の経験主義的性格ということも、臨床面に限定して言われるべきことにすぎない。しかし、臨床において経験主義的でなかった医家など、かつて有ったろうか（「易医」と言われるような人々においてさえそうである）。一方、彼等の理論そのものは、人間の身体をとらえる図式としては極めて抽象的なものである（「毒」といった一見具象的の上ない概念においても）。それは殆ど金元の觀念論に見合うものとさえ言い得る。また、その理論は、正一邪の堅い二元論にもとづく、機械論的色彩の強いものでもあった。

京阪古方のこうした性格は、西説受容を含む医学の展開に、どのような影を落しているであろうか。

（北里研究所付属東洋医学研究所）